

自然主義の小説 (一)

尾崎和郎

序論

「自然主義小説 (le roman naturaliste) のデテルミニスムは生命をおしつぶし、人間の行為よりも一方通交のメカニスムを強調する。その主題はただ一つ、人間と企画と家族と社会のゆるやかな崩壊である——ゼロにかえらなければならぬのである。自然は生産的不均衡の状態にとらえられ、そして、この不均衡が消去される。現存するもろもろの力を無に帰することによって、死の均衡にかえていくのである」(i) とサルトルが書くとき、自然主義にたいする痛烈な批判はみられるけれども、決して自然主義を時代おくれの文学理論として軽視しているわけではない。「自然主義小説のデテルミニスム」、いいかえればフロベール流の「深い沈黙」「生命の息吹の欠除」、「あの大がかりな沈うつな狩獵」(ii) に彼自身深くおかされているがゆえに、執拗にそれを攻撃するのではなく、彼にとってナチュラリスムは無視すべき形骸ではなく、対決し、克服すべき生きものであった。サルトルの自然

主義攻撃は二十世紀中葉にいたってもなおナチュラリスムがかるんじえない問題であることを如実に示すものである。

ところが、われわれの周囲にあつては、自然主義という語を聞いてすぐに思いだすのはゾラであり、しかも、あいつもかわらず彼の生理学、遺伝、実験小説である。全くの無知から「自然主義」は古風で時代ばなれのした理論であり、非科学的で非科学的で、度しがたいしろものとみなされている。

△自然主義的Vという修飾語についても同様である。西歐、とりわけフランスにおいては、△自然主義的Vという語は、いまなお、「自然を第一原理とする」とか、「自然法則に従属する」とか、一応△自然 la nature Vに関連する意味をふくんでいるのに反して、日本では、平板であること、日常瑣事的で無思想であること、前時代的であかぬげしないことを形容する言葉にすぎない。われわれの間では、自然主義という語をペジョラティフ (péjoratif 軽蔑的) にしか使用しないのが長い間の習慣である。自然主義的であることはいまでもなく、自然主義にかかわりあつていふことそれ自体、すで

に間抜けなことにみなされているように思われるのである。

それは明治において、ゾラと自然主義を誤解し、歪曲して受けいれ、しかも、不当に早く自然主義を捨て去ったからである。そのうえ、昭和に入ってから、小林秀雄とその一派が、自然主義の開祖フロベールをゆがめ、そのあとで、バルザックとフロベールが混同され、レアリズムが最高の文学的目標となるという奇妙な現象をひきおこしたのである。このような文学的風土にあつては、自然主義が軽んじられるのは当然というほかはないが、十九世紀中葉における『ボヴァリー夫人』の出現以来、現在にいたるまでの約一〇〇年間、すぐれたロマンの底を脈々と流れているのは、ほかならぬ自然主義の精神であるといつても過言ではあるまい。

一九世紀のなかばから現在まで、すぐれたロマンを支えているものが自然主義であるといつたからといって、わたしは独断で自然主義の拡大解釈をおこなっているわけではない。というのも、その出現に際してはさまざまに命名されながら、結局、本質的には自然主義の系列にくみいれられるにいたる数多くの文学的流派がみられるからである。『居酒屋』が新聞に連載されていたころには、ゾラの『自然主義』を揶揄していたフロベールが⁽³⁾、今では自然主義の元祖であることは周知の事実である。そして、この自然主義の創始者フロベールの小説について、△自然主義小説のデテルミニスムVと攻撃するサルトル——一般には実存主義者以外の名では呼ばれたことのないサルトルその人が、△形而上学的自然主義Vの名

をもって呼ばれることがある。また、かつてミドルトン・マリヤゲオルグ・ルカーチなどによって、正当なレアリズム精神をみごとに結実させた芸術家とみなされるトルストイは、アルベレスによって偉大な自然主義小説家の一人にかぞえられているのである。(4)

さらに、二十世紀の小説家としてのゆるぎない地位を確保して、ナチュラリズムとは全く無縁にみえるカフカさえも、アルベレスによれば、後期自然主義の世代 (la génération post-naturaliste) に属するのである。「カフカは一九二五年以後にしか一般には知られなかつたので、多くのばあい、反抗と攻撃性によってつくられたヴェルフェルやハーゼンクレヴァーの△エクスプレシオニストVの世代に位置づけられる。しかし、実際には、カフカはそのまえの世代、すなわち彼よりわずかに年上のホフマンスタールとリルケの世代に属する。彼は自然主義的宇宙の真唯中に生まれ、内的苦悶を客観的・社会的描写に優先させる人々の一人である。彼は自然主義の第二の世代、すなわち、実証主義精神のなかではごくまれながら、そこに確実なものを見出さないで、苦悶とベシミスムを再発見した世代の後継者である。」(5)

こうしてみてみると、自然主義は決して遺伝や生物学や実験小説のなかに閉じこめられるものではなく、予想外に自然主義のおとしごや末裔がわれわれの周囲にみられるわけである。まずプルーストについていえば、彼はまぎれもないフロベールの嫡出子である。そしてフォークナーは、フロベール

とゾラの最良の部分を継承した自然主義小説家であり、さらにまた、フロベールのもっとも悪しき部分をうけついでとはいえ、ジョイスも自然主義の系列にくわえなければならぬ。日本でいえば、自然主義小説家と呼ばれなければならぬのは、正宗白鳥や徳田秋声や岩野泡鳴などではない。少し観念的とはいえ夏目漱石をあげなければならぬし、なによりも忘れてならないのは、まさしく日本の『ボヴァリー夫人』ともいふべき『或る女』の作家有島武郎である。

それでは、これらの小説家に共通する精神、すなわち自然主義とは、一体何であろうか。そして、さらには、自然主義精神に貫かれた近代小説とは、人間にとって一体何であるのか。わたしは以下において、これらの問題について論じようとするのである。

(1) 辞典よりみた「自然主義」

たとえページョラティフにしろ、△自然主義▽ないし△自然主義的▽という語は文芸用語としてたびたび用いられるのであるが、普通、この語にはいかなる意味がこめられているのであろうか。もはやここで検討する必要のないほど確定的な意味をもっているものであろうか。それとも、かなり漠然とした、あいまいな語として使用されているのであろうか。自然主義小説の核心に入るまえに、自然主義の一般的な意味や解釈を整理しておくことは無駄なことではあるまい。まず辞書類をみることにしたい。

『広辞苑』の△自然主義▽の項にはつぎのように書かれている。

①〔哲〕自然を唯一、絶対または根本の原理とみなし、精神現象をもふくめて一切の現象・過程を、このような自然の所産・所屬とかんがえる立場。

②〔倫〕道德現象を純自然的要素、すなわち、本能・欲望・素質などから説明する立場。また自然に即した生活を理想とする主義。

③ 文学で理想化をおこなわず、醜悪なもの、瑣末なものをおぼえずに、現実があるがままに写しとるを本旨とする立場。十九世紀の末頃、フランスを中心としておこる。

④〔教〕人間の自然的性情を重んじ、これが円満無礙な発達を教育の目的とする立場。」

『広辞苑』のこの解説でわかるように、△自然主義▽という語は、哲学、倫理学、文学、教育学の分野で用いられているが、文学上の自然主義は多くのばあい、美学(esthetic)あるいは美術(beau-arts)の自然主義とほぼ同じものとしてとりあつかわれている。そのほか、音楽、宗教(とりわけ神学)においても自然主義という語が用いられる。かわつたところでは医学における自然主義がある。こうしてみると、かなり多方面で使用されているようにみえるが、主要なものは、哲学と美学(文学を含む)との自然主義である。(6)

まずはじめに、あらゆる分野に共通する自然主義の最も基本的な意味であるが、それはつぎのように捉えられている。

「すべてを第一原理としての自然に帰する人々の体系。」⁽⁷⁾

「自然の欲望や本能のみにもとづく行為、性向、思考。」⁽⁸⁾

「自然以外の現実あるいは規範 (la norme) をみとめない人々の理論。」⁽⁹⁾

「精神的に導かれることなく (without spiritual guidance)、自然の本能から生ずる、あるいはそれにもとづく行為。」⁽¹⁰⁾

△自然の欲望と本能Vといい、△第一原理としての自然Vといい、△自然Vという語の解釈や意味が、これまたさまざまであるが、自然主義は何らかの意味で△自然Vと関係をもっているということになる。

つぎに哲学の分野ではいかなる意味に用いられているのであろうか。

「自然科学の世界観にたつて、物を唯一の実存とする実在論」⁽¹¹⁾

「精神現象は物理的現象と相異せる別種のものにあらずと、自然科学の研究法の普汎の適用を主張せる哲学説。」⁽¹²⁾

右のように、日本の辞典は△自然主義Vを自然科学に結びつけて考えようとする傾向があるように思われるが、一般的にはつぎのように解釈されている。

「自然の外には何ものも存在せず、超自然的なものを排除する学説。」⁽¹³⁾

「自然以外の現実をみとめず、あらゆる超自然的なものの存在をしりぞける学説。」⁽¹⁴⁾

「あらゆる現象とあらゆる価値を、厳密に自然的な(超自然的なもの)と対立する)カテゴリーで説明しようとする立場。」⁽¹⁵⁾

「宇宙は△自然法則Vによって支配されており、超自然的な介入の余地がないという学説。」⁽¹⁶⁾

ここで共通するのは、自然主義が△超自然的なもの (le surnatural)Vをしりぞける学説であるということであるが、△イデアリズムVと対立する学説としてとらえられるばあいもある。そして、△超自然的なものVを排除する説や、イデアリズムに対立する理論は、すべて△ナチュラリズムVとみなされることが多い。⁽¹⁷⁾ マテリアリズム、パンテイスム、

ポジティブイスム、マルキシスム、アンピリスムなど多くの学説がナチュラリスムにくわえられているのである。「ひろい意味におけるナチュラリスムは、アリストテレス、犬儒派、ストア派、ブルーノー、スピノザ、ホップス、コント、ルソー、ニーチェ、マルクス、ジェームズ、デューイ、ホワイトヘッドによってさまざまの形式で保持されてきたのである。」(18)

ハイデアリスムに対立するものVを自然主義と規定する非常に大まかなやり方にたいして、「社会学的理論としての自然主義」を、いわゆる自然主義とみなすかなりせまい見方もある。「この自然主義は自然法則(風土、地理、生物的条件など)によって社会的発展を説明しようとする。マルサス主義、スパンサーの『有機的理論 *théorie organique*』、『社会的ダーウィン主義』などは自然主義の一形態である。」(19)

「自然科学的な方法で社会をとりあつかおうとする」この考え方にたいしては、つぎのような批判がくわえられることがある。「この考え方は一種の機械論的唯物論であり、人間を社会的諸関係の総体としてとらえておらず、また、この諸関係の特殊性(自然科学的諸関係にたいする)を考慮していない」と。(20)

つぎに倫理学では自然主義はつぎのように解釈されている。

「道義を自然的衝動より派生せるものとして説明せんとする倫理説。」(21)

「道徳的生活は自然の法則に合致するところに成立するという学説。」(22)

「倫理学上では、人間の自然的素質を基礎として道徳的規準をたてることになるが、さらに觀念化して理想の本質的人性を自然と解し、これにしたがう生活を、人間のあるべき理想と説く学説ともなる。ストア派はこれである。」(23)

これをさらに別の言葉でいいかえればつぎようになる。

「道徳的生活とは生物的生活の延長にほかならず、道徳的理想は生きる意志 (*le vouloir-vivre*) を構成する欲求や本能を表現することである。」(24)

ここで強調されているのは、「普通ナチュラリスムと呼ばれるものもつとも典型的な特徴、すなわち、本能の尊重、個人的自然性 (*la spontanéité individuelle*)、'生物的生命にたいする信仰'であり、「人間の目的と動物的目的の等質性」である。自然的事であること、生物的・動物的であることは決して忌むべきことではなく、「自然のなかに理想が具体化されている」のである。これはつぎのようにいいかえることも

できるわけである。(25)

「歴史、社会、人間の行為などによってけがされずに、与えられたままの姿を、本来の姿として、そこに帰ることを要求する。したがって、超自我、つまり神をはげしく否定し、もとのけがれなき姿に帰ることが、人間の最高の要請なりと考えた。根底には人間の性善説が横たわっており、諸悪はむしろ歴史と社会の産物にすぎないとみている。ルソーがこの傾向の創設者である。」(26)

つぎに文学上の自然主義であるが、そのまえに、これと合わせて密接に関連する美学(とりわけ美術)上の自然主義について一応の検討をおこなっておかなければならない。

「芸術は自然の再現でなければならぬ」という理論。(27)

「自然の厳密な模倣。イデアリズムやサンボリズムと対立。」(28)

「あるがままの自然を再現することに専念する芸術家の実用的体系。」(28)

「自然および自然的生活のありのままの模倣を芸術の目的とする美学説。」(29)

これらの解釈で共通するのは、「あるがままの自然」と「自然の再現」である。この意味において、「イタリア・ルネサンスの理想主義的傾向にたいして、北欧ルネサンスのもつ現実の自然にたいする素朴な、そして誠実で愛情にみちた観察と表現」や、「十七世紀オランダ派の風景画・風俗画」が自然主義的とみなされる。しかし、「とくにこれを時代様式の名称としてみるばあいには、十九世紀前半イギリスに発展したコンスタブル、ボニントン、ターナーらの風景画、および、それから多くの刺戟をうけてフランスに発生したバルビゾン派の絵画をさしている」。すなわち、これらのイギリスの画家たちは「従来の人物本位の絵画にたいして、平和な田園の風景や、霧の多い川や海の自然を深い愛着をもって静かに暖かくえがきつづけた」ことにおいて、そして、「その刺戟の下に、世紀のなかば、フランスにでた風景画家たち、コロ、ミレー、テオドール、ルソーらを中心とする一群は、都会の騒音をはなれて、しずかないなかに住み、好んで田園風景や風物をえがき、森や川岸や四季おりおりの眺めをえがいた」ことにおいて自然主義にくええられている。しかし、この自然主義は、「おだやかな自然(風景)にたいするすなおな観察」、「情味と愛情にあふれる扱い方」、そして「自然そのものへの心からの没入」という点で、「文学史上のいわゆる自然主義運動とはややことなる」とされている。「むしろ文学における自然主義に対応する運動としては、マネやモネやシスレーらが技法の革新をかかげて登場し

た印象主義にあった」と解説されている。(30)

このように、一応、明確に自然主義の画家をあげるのには、**「現実の美術史の上においては、純粹の自然主義とか、純粹の理想主義があつたわけではなく、自然主義といつても何らかの理想化をとめない、理想主義といつても自然描写を地盤とすることが多かつたのではあるが、しかし美術の歴史がこの二つの極の間を振動しながら、その独自の位置において個々の特色を示しつつ発展してきたという見方も可能である」**として、**「旧石器時代の絵画、古典ギリシアの美術、後期ゴシックの建築彫刻、近世前期の北歐絵画、一九世紀のバルビゾン派、写実派、印象派などに、それぞれ内容のことなつた自然主義的傾向を指摘する」**にとどまる場合もあれば、(31)さらには、**「一般的には、各時代、各様式をつらぬいて多趣多様にあらわれる、対象を忠実に写しとつて再現する態度をいう。しかし、近年の美術批評では否定的意味にこの語を用いて、現実を受動的にうけいれ、現象の偶然的細部に興味を奪われ、感動、積極性、思想的集中を欠いた態度をさす」とする場合もある。(32)**とくに後の方の解釈などになると、**「自然主義を「自然そのものへの心からの没入」とする解釈と全く対立することになる。**

美術における自然主義も文学における自然主義にくらべてあまり耳にしないが、それ以上に聞かないのが音楽における自然主義である。つぎに引用するのは数少ない自然主義解釈の一つである。

「自然または客観的実在の描写というだけなら、十五世紀ごろのネーデルランドの作曲家から今日にいたるまで数かぎりなくあるが、文学上の自然主義との関連は、十九世紀中期以後のフランス歌劇にもっとも早く、またもっとも明白にあらわれている。このばあい、自然描写の手法はもちろんだが、題材がすべて現実社会であり、歌詞も完全に散文(たとえばブリュノーの作品など)のものもある。ピゼットの(カカルメン)も自然主義傾向の先駆といえるが、アルフレッド・ブリュノーのゾラの作品による歌劇(ケケム)も、(メシドー)も、(大旋風)も、(子供王様)などが代表的なものであり、ギュスターヴ・シャルパンティエの(ルイーゼ)もこの傾向の傑作である。

またこれらと完全に同一視することはできないが、イタリアのレオンカヴァロの(パリアッチ)、マスカーニの(カヴァレリア・ルステイカーナ)などによる(ヴェリスモ) (真実主義)運動も一種の自然主義とみてよからう。歌劇以外にも、たとえばドイツ・ロマン派の諸作曲家をみても、あるいはドビュッシーの印象派にみられるごとく自然描写なくしては成立しないが、しかし、とくに文学上の自然主義との直接の結びつきはない。(33)

以上、哲学、倫理学、美学における自然主義の常識的かつ最大公約的な意味や解釈を列挙してきたのであるが、例外的な場合をのぞいて、(34)自然主義といえば、主として文

学上のそれをしめすことになっていることは、いずれの辞典も文学上の自然主義に多くのスペースをさいていることよってあきらかである。フルキエの哲学辞典も哲学における自然主義よりも文学上の自然主義に重点をおいているし、林達夫他編の『哲学事典』は、「自然科学の世界観にたつて物を唯一の実存とする實在論」であるけれども、一般的には「文芸における近代リアリズムの一分派で、生理学、生物学が人間を条件づけるというゾラの遺伝をあつかう実験小説にはじまる主張をさす」(35)として、哲学上の自然主義を無視している。それでは、文学の上では、自然主義はいかなる意味や解釈が与えられているのであろうか。

「自然または現実にたいする密着、および、その忠実な表現を特徴とする様式 (style) または方法。」(36)

「人間生活や性格発展にたいする遺伝と環境の役割を強調する文学上の理論。」(37)

「自然の力、すなわち、遺伝、環境、物質的な力との関連において現実を分析する態度。」(38)

「道徳的、美学的偏見なく選択され、それゆえに真理をゆがめられていない、観察できる事実のみをもつばら再現すること。」(39)

「直接的に、そして主として自然から着想をえようとする文学理論。」(40)

「現実の理想化を禁じ、人間の中にあるもので、自然とその法則に従属する側面を主として力説する理論と流派。」(41)

「実証科学の方法と結果を芸術に適用することによって、現実のあらゆる側面、とりわけ、もつとも卑俗な側面を完全な客観性をもって再現しようとする、ゾラの周囲にグループを構成した文学流派。」(42)

「十八・十九世紀の自然科学の発達にともない、その研究方法である観察と実験とを人間と社会との研究に応用し、えられた結果を客観的に記述する文学態度をいう。」(43)

「テーヌは一八五八年バルザックを論じて、*naturaliste* と呼んだが、一般的に、科学者が生物学的事実を試みることを、社会的事実を試みようとする詩人哲学者の努力を自然主義と呼ぶようになった。」(44)

これらの解説は、いずれも同じことを手をかえ品をかえていいかえているようにみえる。△遺伝と環境▽、△自然とその法則▽、△実証科学の方法と結果を芸術に適用▽、△現実▽、△現実分析▽、△観察できる事実▽、△卑俗な側面▽、

△理想化の禁止V、△客観性V、△客観的に記述V、△再現V、△実験V、△生物学的のVなど、自然主義という語を耳にしたとき、普通、われわれが思いおこすものすべてが網羅されており、これ以上、自然主義小説について検討する必要がないようにさえ思われてくるが、たとえ常識的な知識に満足するとしても、これにとどまるものではないゆえ、その起源、影響、特徴、時期について、いま少し詳細に検討して見る必要があるだろう。

「フロバールのレアリスムとテーヌのポジティヴィスムの二つの影響のもとに、自然主義派 (l'école naturaliste) が構成されるのは一八六〇年から一八八〇年の間である」という解説があるが、⁽⁴⁵⁾まず時期についていえば、がいてして「十九世紀後半」となっている。しかし、「一八七〇年——一八九〇年前後の期間」とか、あるいは「一八八〇年——一九〇〇年」とか、かなりあいまいなものである。

つぎにみなければならないのは△レアリスムVとの関連である。自然主義とおなじように写実主義の意味も決して明確とはいえないが、つぎに列挙する二つの解釈が一応平均的なものであろう。

「詩情や想像力が美化しない客観性をもって、あるがままの自然と人生を描こうとする作品の性質。

世界の客観的ヴィジョンを規準とする文学理論。

……しかし、とくに文学史の一時期に△レアリスムVの名

を与える。絵画における写実主義革命 (la révolution réaliste) につづいて、一八五〇年頃、文学におけるレアリスムが、ロマン主義小説のリリスムとロマネスクと過度の想像力とにたいする反動としてあらわれる。メリメ、スタンダール、アンリ・モニエ、とりわけバルザックの芸術によって準備されたレアリスムは、人間的・社会的資料の探究によって、もつとも平凡な現実の全体的・客観的再現をめざすものである。……」⁽⁴⁶⁾

「理想化やロマン主義的主観性なしに人生をえがこうとする態度。……レアリスムはおもに日常生活の瑣事や中下層階級の生活に関心をいだく。そして、ここでは、性格は社会的な諸ファクターの産物であり、環境は劇的な錯雑における欠くことのできない要素である。」⁽⁴⁷⁾

「対象を客観的態度で表現しようとする主張。広義には、中世的・超現実的文学にたいして、現実的な表現をめざす近代文学の特色である。狭義のばあいは、十九世紀後半のヨーロッパ文学運動による科学的現実的な対象の追究をさす。また、しばしば自然主義と混同されて用いられる。狭義の写実主義といえども浪漫主義の反動ではなく、一つの変形、ないし発展ではないかという疑問を提出されている。」⁽⁴⁸⁾

△レアリスムVと△ナチュラリスムVの関係は、一般につ

ぎのようにとらえられている。

「ナチュラリスムは通常ハレアリズムVと同一視されている。」⁽⁴⁹⁾

「ナチュラリスムはレアリズムのヴァリエーションである。」⁽⁵⁰⁾

「リアリズム文学を徹底化して極度に実証科学的に人間を観察・描写しようとするもの。」⁽⁵¹⁾

「(1)多くのばあい、ナチュラリスムは自然のなかでもっとも美しくないものの側面を好んでえらぶことに成りたつレアリズムの誇張をさす。

(2)ある作家(ゾラ)にあつては、ナチュラリスムは自然科学の方法を芸術作品に導入することにある。」⁽⁵²⁾

「Realism がその独自の素材と形式の審美的な統一を意図するのに比し、Naturalism は唯物論的、生物学的、決定論的な世界観を強くうちだしている。」⁽⁵³⁾

「ナチュラリスムは……一八四〇年代以後、レアリズムという語とまったく同義の美学・文学用語として使われはじめた。今日フランスではその差違をみとめぬ学者も多い。しか

し、一般に、人間的あるいは社会的事実には生物学的・生理学的分析を適用する態度をナチュラリスムと呼ぶ傾向はある。」⁽⁵⁴⁾

つぎに問題とされるのは、ナチュラリスムにたいする「テーヌのポジティブイスマの影響」、ないしハ自然主義と実証科学Vの関係である。ここで主役を演ずるのはゾラである。

「十九世紀を何よりも特徴づけるのは科学の勝利である。

これは作家が忘れてはならない事実である」と考えて、ゾラは「自然科学の方法を文学に導入するのである。ここで強調されなければならないのは、十九世紀のもっとも重要な科学的著作、とりわけダーウィンの『種の起源』の翻訳(一八六二年)と、クロード・ベルナルの『実験医学研究序説』(一八六五年)の出現した翌日に、自然主義が定義づけられたということである。……世界の唯物論的・機械論的概念を基盤とする自然主義的パースペクティヴにおいては、人間はハ自然界の他のものと同じデテルミニスムに従属し、遺伝、環境、歴史的状況などもろもろの力の働きのなかで生じる自然的産物とみなされる。そして、これらもろもろの力を最大の厳密さをもって分析しようとゾラは考えるのである」。

こうして「エクス・アン・プロヴァンス」の学術会議への『小説について Du Roman』の提出から(一八六六年)、一八八〇年の『フィガロ』に発表された論文を収めた『論戦 Une Campagne』にいたるまで、数多くのマニフェストに

おいて」ゾラの見解がしめされるのであるが、それは一般的にはどのような評価をうけているのであろうか。(55)

「彼はクロード・ベルナルルの『実験医学研究序説』を剽窃して、……なまの現実の細心綿密な観察と……実験との上に小説の真実をうちたてる。」(56)

「クロード・ベルナルルは厳密な科学的メトードは無機物にも有機物にも同じように適用できることをしめしたが、ゾラはそのメトードを人情熱的・知的生活Vに適用しようとする……文学は実験室の実習となる。小説家の実験的方法とは、Aある物語のなかで人物を動かし、研究される現象のデテルミニスが要求する通りに事実が継起することを証明することVである。」(57)

「クロード・ベルナルルの『実験医学研究序説』のそばくなアナロジーによって書かれた『実験小説論』(一八八〇年)……

ベルナルルのデテルミニズムが、複雑な現実の自然を分析して単純な過程をとり出し、研究の対象を限定することによってなりたっているのを、ゾラは複雑な要因の無数に集まった人間に対応させるという幼稚な誤りを犯したが、観念論的、神秘論的、神秘主義的、感傷的文学を克服しようとする自覚はうかがえる。」(58)

「彼は『実験小説論』などを書いて、単に人生を観察して描写するのみでなく、あたかも科学者が試験管中で種々の薬品をまじえてその反応を研究する如く、人間生活に方法的・実験的な研究を試みてその反応を科学的な冷静な眼で記録しようとしたのであって、その方向はおのずと二つに分れ、人間生活を生理学者或いは医者への如き立場から観察診断する一方、社会学者と同様に人間社会の機構と組織を研究しようとしたのであった。」(59)

右のような計画の下に書かれたと一般に考えられている、ゾラの大著『ルーゴン・マカール双書』については、一般につきのような解説がなされている。

「ゾラの『ルーゴン・マカール双書』は遺伝よりみた人間と、社会的な生活環境よりみた人間の生態とを描いた大著である。」(60)

「科学性をさらに徹底して、遺伝と環境によって人間が形成されると規定し、ことに心理を生理に、性格を体質にかえそうとしたのがゾラであった。彼はこの主張のもとに、『ルーゴン・マカール双書』二十巻を完成し、第二帝政下におけるフランスの全社会を一家系の消長を通して書こうとした。」(61)

「ゾラは一方に生理学的に遺伝性のおそろしさを研究し、他方においてはこれらの人間の生存する社会的環境を研究し、それらの研究をする場合には、実験的方法を用いて精細なる記録をとり、それを集めて、やがて集積したる組織をたてようとするのである。」(62)

「かつて見られなかった大胆と精細さを以て、人間の本能生活を描いて遺伝性の恐ろしさを暴露したり、社会的環境の人間に与える影響を追究したりした。」(63)

『ルーゴン・マカール双書』に関する以上四つの解説はいずれも遺伝と環境からのみ評価しているが、つぎのような見方もある。

「逆説的にいえば……ゾラの大作品が重きをなすのは、社会的資料の価値によるよりも、敘事詩的想像力の激しさとヴィジオネールの豊かな創作力によつてである。」

その意に反してロマン主義の相統人であったゾラは、道徳的・社会的改革者の天職にしたがった。ナチュラリズムは社会的自然の法則を発見して、それを冷ややかに記述しようとするばかりでなく、これらの法則を知ることによつて、社会に働きかけ、社会を変え、社会を改善しようとしたのだ。事実、ヨーロッパの文学運動としてのナチュラリズムは、大工業都市が異常に膨張し、社会闘争の重要性が増大した一八八

〇年から一九〇〇年の間に位置づけられる。

科学的冷静さというその主張にもかかわらず、大部分のナチュラリストは、かくしてこの社会闘争に身を投じる。かれらはブルジョワ的偏見を攻撃し、小説の登場人物を好んでプロレタリア的環境からえらび、次第に、現代社会の醜悪さに描写のアクセントをおくことになる。」(64)

最後に、自然主義の作家（劇作家も特にふくめる）としてゾラ以外にどんな人があげられているのであろうか。

フランスでまずあげられるのは、ゴンクール兄弟である。「真の資料と科学的観察にたいする配慮、性格を気質 (le tempérament) におきかえたこと、卑俗な現実から借りた主題などによつて、ゴンクール兄弟の小説 (『シャルル・ドマイエ Charles Demilly』(一八六〇年)、『ジェルミニエ・ラセルトゥー Germinie Lacerteux』(一八六五年)、『ジェルヴェ夫人 Mme Gervais』(一八六九年) はハナチュラリズムVに属する。』(65) つぎに『メダン夜話 Les Soirées de Médan』(一八八〇年) のなかで、いつわりのイデアリズムに現実の真実を対立させた芸術的マニフェストをしめしたハメダン・グループVのギート・ド・モーパサン、J・K・ユイスマンズ、レオン・エニック、アンリ・セアール、ポール・アレクシス」があげられ、さらにアルフォンス・ドーデーがつけてくわえられる。と同時に「ことなつた度合においてであるが、ジュール・ヴァレス、オクターヴ・ミルボー、マル

グリット兄弟、ポール・アダン、リュシアン・デスカーク、ジュール・ルナールをもこれにくわえることができる。そして、サンボリスムの反動にもかかわらず、その影響は、バルビュスや大戦間の民衆主義 (Ecole populiste) をつらぬいて、セリヌの最初の書物の爆発にいたるまで保持された」とされている。劇作家としては、『カラスの群 Les Corbeaux』(一八八二年)のアンリ・ベック、アンドレ・アントワーヌの『自由劇場 Théâtre』(一八八七年—一八九六年)でひろわれた『赤い服 La Robe rouge』(一九〇〇年)のウジェーヌ・ブリューがあげられる。

つぎにドイツの自然主義であるが、フランス以外で「自然主義が最大の発展をみたのはドイツである。それは、ビスマルク帝国のエスプリー・レアリストと、 Δ 若きドイツのロマン主義の社会的関心とが結合して自然主義を助長した」からだとされている。その作家としては通常 Freie Bühne (一八八九年創立)でその処女作『日の出前』(一八八九年)を上演し、流派の第一人者となったゲルハルト・ハウプトマン、『憂愁夫人』(一八八七年)のヘルマン・ズーデルマン、マックス・ハルベ、ルートヴィヒ・アンツェンゲルーパーなどがあげられている。

「イタリアでは、真実主義 le verisme という重要な運動が、まず自然主義の単純なヴァリエーションとしてあらわれる。ジョヴァンニ・ヴェルガの『グラミグナの恋人』の序文はゾラの論文を思いださせる。しかし、ヴェリスムは、あら

ゆる教育にたいする増悪、功利的文学の拒絶、とりわけ、自由の称揚と過度な個人主義とによってナチュラリスムと非常にことなる。」

「アメリカでは、ナチュラリスムは写実的ではあるが道徳的な文体に堕した長い伝統を継承していた。それは、シオドア・ルーズヴェルトの政治的インペリアルイズムと哲学的ブラグマチズムの勝利とに符合する。シオドア・ドライザーは、新しい世代の作家——民衆の出身で、社会問題に情熱をもち、大工業化から生じた闘争をきびしい明晰さをもって描きだそうと決意した作家——のもつとも典型的な代表者である。」ドライザーのはかには、『搾取章魚 The Octopus』(一九〇一年)のフランク・ノリス、『スタッツ・ロニガン Studs Lonigan』(一九二三年—一九二五年)のジェイムズ・T・ファレルをあげるのが普通である。

イギリスではジョージ・ギッシングとトーマス・ハーディがナチュラリストとみなされる。そしてロシアでは、トルストイ、ドストエフスキ、ツルゲーネフ、チェホフ、ゴリキ一、およびスタニスラフスキの指導下の『モスクワ芸術劇場』(一八八八年創立)、北欧では、イブセン、ストリンドベリー、ハムスン、ビョルンソンなどがあげられる。(66)

最後に、日本のナチュラリスムについても、たとえ世界のナチュラリスムにおける役割が異常に軽微であるとしても、簡単に標準的解釈を整理しておかなければならないだろう。

その時期についていえば、『全盛期が一九〇八年—一九〇

九年（明治四一年―四二年）にかけてで、一九一一年―一九二二（明治四四年―四五年）にはいくぶんおとろえた」とされ、(67)そして、その文学者といえは、一般に、田山花袋、

島崎藤村、国木田独步、岩野泡鳴、徳田秋声、正宗白鳥、真山青果、小杉天外、永井荷風、葛西善蔵、加能作次郎、嘉村磯多、川崎長太郎、長谷川天溪、島村抱月、片山天弦、相馬御風があげられる。その特徴についてはつぎのような解説がみられる。

「生理的な面、特に性欲描写を主にする傾向がつよく、社会環境の描写は弱い。……自然科学的な緻密さ、現実感、客観性に乏しい。」(68)

「浪漫的精神を突きぬけることなく現実世界にたちかえったため、いきおい個人生活の凝視となり、欧州の場合とちがって独特の心境生活を形成した。」(96)

「日本の自然主義の正系は浪漫主義からおこった。……要するに日本の自然主義は、科学性と社会性を欠き、制約された都市の小市民、あるいは地方の農民・漁村の生活を、ゆたかな地方色を背景に客観的に諦視し、ちみつに描写するといふにとどまった。」(70)

「生理的・性的人間現象をとりあつかうことの方が多く、

まだ社会機構の研究という方面までは組織だてられるにはいたらなかった。」(71)

以上が辞典よりみた自然主義である。すなわち、自然主義に関するもつとも一般的で、もつとも常識的な解釈である。ここに列挙した解説や意味のなから、適当なものをえらび、組みあわせたり、要約したり、敷衍したりすれば、一通りの自然主義解説を書くことができる。A一通りの解説Vどころか、おそらく、簡潔で、申し分のない解説の作成さえ可能であろう。しかし、それがたとえ常識的にはそつのない立派なものであるとしても、以上の解釈では、ゾラの作品さえも十分に包含しえない自然主義である。ゾラの生きていた自然主義の全盛期、すなわち十九世紀末期の自然主義評価を一步もでない解釈が大多数をしめているように思われる。二十世紀に入ってから、フロベールやゾラの影響を直接・間接に受けた数多くの小説家が輩出し、ナチュラリスムの解釈は大きく変化した筈である。常識的な知識に満足するとしても、この変化にまで思いをいたす必要があるように思われるのである。

註――

(1) Jean-Paul Sartre, *Situations, II*, Gallimard, 1948, pp. 172—173.

(2) *Ibid.*

- (3) Gustave Flaubert, Correspondance, 1923, le 14 décembre 1876.
- 「J'ai lu, comme vous quelques fragments de l' *Assommoir*. Ils m'ont déplu. Zola devient une préceuse, à l'inverse. Il croit qu'il y a des mots énergiques, comme Cathos et Madelon croyaient qu'il en existait de nobles. Le *Système légère*... Il a ces principes qui lui rétrécissent la cervelle. Lisez ses feuilletons du lundi, vous verrez comme il croit avoir découvert «le Naturalisme!»」
- (4) R. M. Alberès, Histoire du roman moderne, Albin Michel, 1962, pp. 57—77.
- (5) R. M. Alberès et Pierre de Boisdeffre, Franz Kafka, Editions Universitaires, 1960, pp. 37—38.
- (6) 西村好太郎『自然主義のこころ』「自然が病気をなぞつた心の難いところ、あるいは、その主眼な方法であるところの「理解」を解説する」(Grand Larousse Encyclopédique, 1963)。
- (7) Emile Littré, Dictionnaire de la langue française, Gallimard-Hachette, 1957.
- (8) Webster's Third New International Dictionary, 1963.
- (9) Dictionnaire de la langue philosophique par Paul Foulquié avec la collaboration de Raymond Saint-Jean, P. U. F., 1962.
- (10) A New English Dictionary, Oxford, 1908.
- (11) 林 蓬夫他編『哲学事典』平凡社、一九五四年。

- (12) 上田万年、松井簡治『大日本国語辞典』、富山房、一九五二年。
- (13) Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française par Paul Robert, Société du Nouveau Littéré, 1959.
- (14) Paul Foulquié.
- (15) The Columbia Encyclopedia, 1963.
- (16) Dictionnaire des Religions par E. Royston Pike (Adaptation française de Serge Hutin), P. U. F., 1954.
- (17) The American Peoples Encyclopedia, 1958.
- (18) Encyclopaedia Britannica, 1957.
- (19) The Columbia Encyclopedia.
- その他——
- 「マチリアリスム、ペンティスム、ホジティヴィスムはすべてナチュラリスティックである。」(Encyclopaedia Britannica, 1957.)
- 「マルクスによれば、共産主義は完成された自然主義である筈であった。」(キリスト教大辞典、教文館、一九六三年、執筆者、佐々田良勝)
- (20) Grand Larousse Encyclopédique.
- (21) 出 隆、古在由重編『哲学用語辞典』、青木書店、一九五二年。
- (22) 『大日本国語辞典』 Paul Foulquié.
- (23) 『哲学用語辞典』、青木書店。
- (24) André Lalande, Vocabulaire technique et critique de la

- philosophie, P. U. F., 1960.
- (25) Ibid.
- (26) 一九六四年版『現代用語の基礎知識』(自由国民社(執筆者高桑純夫))。
- (27) Adolphe Hatzfeld et Arsène Darmesteter, Dictionnaire général de la Langue Française, Librairie Delagrave, 1932.
- (28) Dictionnaire de l'Académie Française, Hachette, 1935.
- (29) 『大日本国語辞典』
- (30) 『世界大百科事典』平凡社、一九五七年(執筆者、嘉門安雄)。
- (31) 『西洋美術辞典』東京堂、一九六四年(執筆者、井島 勉)。
- (32) 『現代用語の基礎知識』(執筆者、今泉篤男)。
- (33) 『世界大百科事典』(執筆者、園部三郎)。
- (34) Encyclopaedia Britannica 及び The Encyclopaedia Americana が文字上のナチェラリスムについて全く触れていないのは奇異である。
- (35) 林 達夫他編『哲学事典』
- (36) A New English Dictionary, Oxford.
- (37) Webster's Third New International Dictionary.
- (38) The Columbia Encyclopedia.
- (39) The American Peoples Encyclopedia, 1958.
- (40) Dictionnaire de l'Académie Française.
- (41) Paul Robert.
- (42) Grand Larousse Encyclopédique.
- (43) 中島健蔵編『現代日本文学事典』河出書房、一九五四年。
- (44) 『世界大百科事典』(執筆者、吉田精一)
- (45) Grand Larousse Encyclopédique.
- (46) Ibid.
- (47) The Columbia Encyclopedia.
- (48) 『現代日本文学事典』
- (49) The American Peoples Encyclopedia.
- (50) Dictionnaire de l'Académie Française.
- (51) 『現代用語の基礎知識』(本多顯彰)。
- (52) Paul Foulquié.
- (53) N. E. D. においては Realism がつぎのように解釈されている。「…最近ではそれは、デテールが不快なまたはきたない性格である、という意味をふくめて使用されることが多い。」
- (54) 『英米文学辞典』、研究社、一九六一年(執筆者、平井正穂)。
- (55) 土井寛之他編『フランス文学辞典』言潮社、一九六三年。
- (56) Dictionnaire universel des Lettres publié sous la direction de Pierre Clarac, S. E. D. E., 1961.
- (57) Grand Larousse Encyclopédique.
- (58) Dictionnaire universel des Lettres.
- (59) 『フランス文学辞典』
- (60) 本多秋五他編『世界文学辞典』、中部日本新聞社、一九五一年。
- (61) 『現代日本文学辞典』
- (62) 『世界大百科事典』
- (63) 藤村 作編『日本文学大辞典』新潮社、一九五五年。
- (64) 『世界文学辞典』
- (65) Dictionnaire universel des Lettres.
- (66) Grand Larousse Encyclopédique.

Dictionnaire universel des Lettres ほか。

- (66) 『世界大百科事典』
- (67) 『現代日本文学辞典』
- (68) 『現代用語の基礎知識』
- (69) 『世界大百科事典』
- (70) 『日本文学大辞典』
- (71)